

地域医療の現場から

これまでの経験を これからの糧に

熊本市立植木病院
診療放射線技師 鍋島達矢



病院全景

🏥 病院の概要

- 設立年月：昭和31年1月
- 許可病床数：141床
- 入院基本料：10対1
- 職員数：95人
(再掲) 医師10人 看護師59人
(平成25年12月31日現在)



西南の役戦没者慰霊之碑
(田原坂公園)

さまざまな変遷を経て 植木町立病院から熊本市立植木病院に

植木町は熊本市北区に位置しており、名産品である“スイカ”や西南戦争の激戦地“田原坂”で、ご存知の方もいらっしゃるかと存じます。この“田原坂”を含む植木町・玉東町に広がる多くの西南戦争遺跡群は平成25年3月に、明治以降の戦跡としては、初めて国指定史跡となりました。この戦役が、幕末から始まった明治期の変革の終わりを印象づけ、その後の日本の形勢に大きな影響を与えたことを鑑みますと、そ

の歴史的価値が改めて評価され、国指定史跡となったことは、地域の誇りとなるに違いありません。

熊本市立植木病院は、これまでさまざまな変遷を経て今日に至りますが、私が平成14年(当時、植木町国民健康保険植木病院)に入職してからも、同年12月に現在地に新築移転、平成22年3月に熊本市との合併、名称も「熊本市立植木病院」に変更となりました。その後、熊本市は平成24年4月に全国で20番目、九州で3番目の政令指定都

市へと移行してまいりました。このような変遷や、それに伴うニーズの変化、または、医師不足などの時折の状況によって、当院も、そのあり方や役割に多少なりとも変化や対応が必要となりました。しかし、私たちの担う地域医療機関としての役割の“重要性”に大きな変わりはないと思います。むしろ、高齢社会と向き合う中で、診療放射線技師としての立場からでも、その重要性は増しているのではないかと考えずにはいられません。

放射線検査業務の中で

当院の診療放射線部には、3人の診療放射線技師が所属しております。一般撮影装置、X線透視装置、CT、MRI、血管造影装置、マンモグラフィを配し、現在、骨密度測定装置や画像情報統合管理システム（以下、PACS）の更新が推し進められているところであります。

移転時に、CT・MRI検査のフィルムレス化を導入いたしました。今回のPACSの更新におきましては、より円滑な診療を目的として、全ての検査に対してフィルムレス化を導入していくこととなりました。共同利用ではフィルムにて画像提供を行ってまいりましたが、PACS更新以降は、可搬型記録媒体によるデータでの画像提供に切り替えていく計画で、フィルムの取り扱いが無くなることで、運搬などの負担の軽減になることと思います。

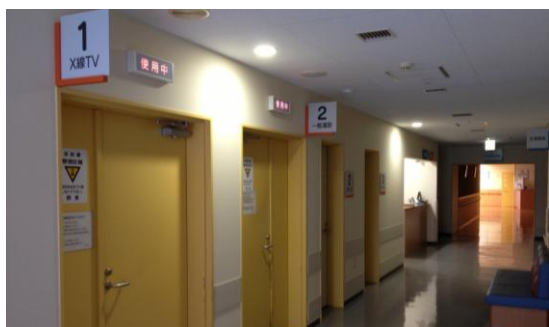
救急医療に対しては、当部門ではオンコール体制にて対応しております。限られた人員の中での業務になりますので、少なからず負担もあります。しかし、救急医療における画像診断の重要性は身をもって実感させられることも多く、業務を通して“やりがい”があることも確かです。

「より地域に浸透した病院を」との思い

どちらの医療機関でも同様かとは存じませんが、当院でも職員は診療業務以外に、さまざまな職務も担っております。

私は現在、待遇に関する委員長に任せられ、当院の待遇改善に努めております。そこでの業務の一環に、患者さまのお声を聞く『患者さま満足度調査（アンケート）』があります。アンケート調査の中に、当院の選択理由をご記入いただきますが、「地域の病院だから」という回答を、毎回の調査で見ることができます。何気ない回答のように思われることもあるでしょうが、この「地域の病院だから」という言葉から、私たちは、何かしらを感じ取り、考えさせられることがあるのではないのでしょうか。患者さまから「地域の病院だから」利用していただくことは大変嬉しいことであり、私たち職員が「地域の病院だから」という思いを持った診療を行っていくことが大切ではないか、少なくとも、私自身そのように考えてしまいます。

現在地に移転する以前の当院は、地域の方々に「(植木)町立病院」と呼ばれ、合併し熊本市となった現在も、「町立病院」というお言葉を耳にすることがあります。以前の「町立病院」が、地域に浸透した存在になっていたことをうかがわせる言葉ですが、これから私たちは、「熊本市立植木病院」として、より広域に地域に浸透した存在になり、貢献度を高めていかなければならないと考えております。



放射線受付



MRI装置



スタッフが（右から2人目が筆者）

多くの経験をどう生かすか ～これからを考える

私自身も、先述したような変遷であったり、業務上の立場・状況の変化であったりと、考えさせられること、そこから教えられたことも多く、入職してからの12年の間にさまざまな経験を得ることができたように思います。現在の職務から多くの経験を通して、病院運用の取り組み方や、地域目線での考え方を深く学ぶことができました。これからは、学び取ったものを、どのように診療放射線業務の中で生かし、地域貢献を果たしていくか、そのような取り組みが課題となりそうです。